

「富めるときも貧しいときも、健康なときも病めるときも……死が二人を別つまで、互いに愛し合い貞節を守ることを誓いますか？」

「はい、誓います」

「誓います」

幸せそうな笑みを浮かべた夫婦がそう誓い合い、口付けを交わす。

その様子を、僕、アゼルは心中の暗い気持ちを押し殺しながら、無理に笑みを浮かべて見守っていた。

(なぜ、僕ではなかったんだ。アゼリア……)

幸福そうなその新婦は、自分の幼馴染である女性。

ずっと好きだった。

幼い頃、一緒に手を携えて登った丘の花畑で、婚約もした。

もちろん、それはままごとと同じような、稚い口約束にしか過ぎなかった。

少なくとも彼女にとっては、そうだったのだろう。

僕は彼女にとって、二つ年下の弟のような存在でしかなかったに違いない。

(仕方のないことだ)

相手の男、ジェリウスは、身分も財産もある騎士で、アゼリアより少し年上の、僕のみから見ても彼女に相応しい、逞しい美男子だ。

対して僕の方は、死体を扱う穢れた職業として敬遠される、葬儀と埋葬、そして墓守を生業とする一家の小倅に過ぎない。

彼と結ばれたほうが、彼女にとっても幸せであるに決まっている。

僕は自分にそう言い聞かせた。

「今日は来てくれてありがとう、アゼル」

そんな僕の胸中などつゆ知らぬアゼリアは、幸せそうな様子で話しかけてきた。

「おめでとう、アゼリア」

「嬉しいわ。あなたも早く、かわいい子を見つけて幸せになってね」

そう言うと、さっさと僕のテーブルから離れて、次の人のところへ回っていく。

僕は俯いて、唇を噛み締めた。

(他の子となんて、幸せになれるものか)

昔からずっと想ってきたのは、アゼリアのことだけだ。

でも、彼女は他の男を選んだ。

その男と死ぬまで添い遂げると、誓いを立てた。

小さい頃、先に婚約をしていたのは僕の方なのに、彼女はそんなことはすっか

り忘れてしまっている……。

(……いいとも)

僕はこの時、昏い決意を固めた。

彼女は大切な人だ、その気持ちを、彼女が立てた誓いを、僕は尊重する。

ジェリウスと死ぬまで添い遂げるといふならそうすればいい、彼と共に幸せになればいい。

(それでも、僕は諦めない)

来るか来ないかもわからない機会であっても、僕はいつまでも待つ。

はっきりと、そう決めたのだ。

それからまた、何年かの時間が流れた。

アゼリアとジェリウスとは幸せな生活を送っていて、息子も生まれた。

子供を産んでも彼女の容色はまるで衰えず、むしろますます美しくなっていくようだった。

僕はそれを尻目に、墓守などの仕事を続ける傍ら、魔術の勉強をした。

墓所を平穏に保つため、墓荒らしを退けたりするため……、そして機会があれば、アゼリアを手に入れるために。

(でも、決して僕の方から手出しはしない。僕は、アゼリアの幸せの邪魔をしたりはしない)

運命が僕に機会をもたらししてくれないのなら、それでもいい。

しかし、もしその時が来るのなら、決してためらわない。

僕はそう胸に誓って、彼女の姿を遠くから見守りながら、その時が来ることを願ってただ待った。

そして、運命の神フォーラムと墓所の神モルディリギアは、僕に微笑んでくれた。

「アゼリアが、亡くなった？」

「はい。二人目のお子様を……長女をお産みになった後、産褥熱で……」

呆然とする僕の前で、連絡の使者はそう言って涙ぐんだ。

「つきましては、葬儀と埋葬の手配をお願いいたします。知己であるあなたの手で弔っていただければ、アゼリア様もお喜びになるでしょう」

その使者はそう言って頭を下げると、予定の日時や何かを伝え、前金を置いて帰っていった。

「……………」

彼が去った後も、僕はしばらくの間動けなかった。

悲しみや喪失感ではなく、待ち続けた時が思ったよりもずっと早く来たことに対する衝撃で、頭が真っ白になっていたのだ。

必要ならば、お互いが白髪の老人になるまででも待とうと思っていたのに。

(アゼリア…………)

ついに、僕のところへ来てくれるのか。

僕は逸る気持ちを努めて抑えてふらふらと立ち上がると、どうにか考えをまとめて、必要な準備を整えにかかった…………。

アゼリアのために、慎ましくも立派な葬儀が取り行われた。

家族や知人たちが涙と共に彼女に最後の別れを告げて、棺が埋葬される。

その夜————

「……よし」

誰もいなくなった墓所で、僕は密かに棺を掘り返していた。

労働力としては、魔術の知識を活かして他の屍から造り上げたゾンビを数体、使っている。

もちろん、死霊術は禁忌であり、他人の死体を勝手にこのような作業に用いるのも、著しく倫理にもとることではある。

だが、ついに大望が叶おうかという時に、そんなことを気にしてはいられなかった。

(アゼリア！)

僕は掘り起こした棺の中を覗き込む。

そこには、死化粧を施された、美しいままの姿のアゼリアがいた。

葬儀のために、そしてこの目的のために、僕は薬品や魔術を使って、彼女の姿を限りなく生前の時のままに保存しておいたのだ。

実際、血の気が失せていることを除けば、彼女はただ眠っているだけのようささえ見えた。

「ああ、アゼリア。これでようやく、二人きりだね」